

相模ヶ原

太田 正左エ門

(旧職員)

昭和十六年春から昭和二十二年春まで旧制能代中学に在勤したので、戦前から戦後まで色々な苦い体験、また楽しい思い出が一杯で、今改めて當時を回想しているところです。

山中の花輪から海のある能代に転動した喜びも束の間、その十二月八日大東亜戦争ばつ発。昼休み時間に当直室のラジオを窓に上げて、そのニュースを外に集まった生徒約百人に聞かせたのが昨日のように思い出されます。来るものが来たと云う感じとこれからどうなると云う不安が交錯したが、緒戦の偉大な戦果に酔ったと云う方が本当かも知れない。

秋ひそかに出征された先生の後をうけて三年の担任となり、早朝課外、放課後の一年全員加入の部活動の指導と戦時中の苛烈な教育活動が始まった。しかし部活動の道具が次々と不足になり、私は弓道部、相撲部、最初に乗馬部へと物資配給のある部の指導に移るしか手がなかった。

それもまた十九年二月十五日早朝の校舎全焼によりすべて部活動は停止し、廃校となっていた能代商業学校の旧校舎（長根町）に移転、授業だけは続行することとなった。

この校舎全焼の学校は一晚中の強風で、私はサイレンの音も

聞こえず翌早朝清助町の草薙君（相撲部主将）に起こされ、「先生学校がありません」と云われた時は全く何が何だかわからず、急ぎ駆けつけたが、未だ暗いので樽子山の下から見た校舎は点々と明りが見えるので全焼とは気付かず、あ、よかったと思いつら近づくと点々と明りに見えたのは残火で残ったのは道場だけ。

長根校に移転時は終戦前年であり、五年担任の私は授業は四月だけ。五月より東雲の陸軍飛行学校の飛行機整備に勤労奉仕、七月からは夏休み返上で八森の発盛鋳業所に出勤、十一月より相撲の陸軍造兵廠に移動し、旋盤、フライス盤作業と毎日の空襲定期便、生徒の苦労は全く筆舌に尽くしがたいものであった。しかも卒業式は現地で小松先生（現横手市教育長 小田島先生（亡））と私の三人だけで挙行。式中に空襲があり、私の心の中で最も悲しい思い出の一つである。

その四月から一年担任となり帰校したが、今度は松根油製造で旧校舎跡に急造された全くお粗末な工場で昼夜兼行の作業、そして八月十五日の終戦を迎えることとなる。

二十二年二月頃より校舎再建の地元負担金の依頼に八森地区、

二ツ井地区と回り、新校舎を見ないで母校横手に転任、しかもその校舎から更に、近代的永久校舎に移転、この度、落成式に

松根油の思い出他

同じ学校に二十六年間も勤めていると色々な思い出がありますが、私にとっては赴任当時のことが最も印象に残っています。

昭和二十年四月今の秋田北高校より地元の本校に転任。この頃校内に上級生は殆んど見られず、それ〴〵軍需工場等へ動員され先生方もその監督としてかなり分散されていた模様。新任の私は小野友正先生に松根油（シウコンユ）の監督を手伝ってくれないかと云われ、仕事の大略を説明されたので喜んで引き受けました。こゝに動員されている生徒は作業の性質上柔道部員などすぐれた体力の持主であり、作業場は旧校舎焼け残りの銃器庫とその附近、こゝとグラウンドの間に山と積まれた松根ツコは恐らく空ッ腹をかゝえた人達に掘り集められたものでしょう。

生徒の仕事はそれにマサカリを打ち込み木ッパを作るのに始まり、これが又容易でない作業で、夏も近づくとグラウンド一面に植えられた野菜の葉を渡って来る風をアカシヤの木陰で受け

加えて創立五十周年記念式典挙行の運びとなったことは、誠に慶賀に堪えず、能代高校の今後のご発展を心から祈念します。

小山 善 一 (旧職員)

一息入れながら行なわれ、木ッパが出来ると次は二つの大きな鉄籠に詰め二基の釜に収めネジで固く蓋を締める。これを木ッパの木炭や雑片で蒸し焼きにするのだが、出て来る煙は鉄管で裏の大きな木の水槽の蛇管に導く。水槽には一人の生徒が居て耐えずギーコギーコと手押しポンプで地下水を汲み上げているが、怠けると冷却水が温まり煙のままだ出て来る。蛇管の煙は水槽の中をぐるぐ廻って出口から地面を握って埋められたカメにたらくとドス黒い液（木酢モクサク）となって出て来る。これを時々柄杓でカラコロと音を立てながらドラムカンに汲み移す。何日かで一杯になれば土崎製油所へ。木酢の上に浮かんだ少量の松根油が練習機のガソリンになるのだと云い、釜には一人の海軍兵が配慮されていた。

終戦前夜土崎製油所が空襲され、能代でも感じた底ひびきのする爆音に南の空は赤く燃え、ガソリン等と共に殆んど使ってしまった松根油も燃え尽くしたと聞いている。全く空しい話である。しかしこの油で飛行機を安全に飛ばせてあったのだろうか。

勿論あの頃は不可能を可能としなければならぬ時であったが。終戦になると動員先から生徒と先生、それに特幹等として入隊した諸君や軍関係学生の復学も加え、最上級四年生三組が出

思 い 出

脈々として流れる伝統の上になつて、名門の誉れ高い学校として、実績を築き上げて参りました貴校が、県下一を誇る広大な校地に、竣工なつた新校舎に学び、近代的施設設備の充実と相まって、今こゝに知命の年を迎えることのできましたことは、これに勝る幸せはないものとご推察申し上げ、その栄光に對しまして、心からお慶びを申し上げます。

さて、私が貴校にお世話になつたのは、終戦直後の昭二十一年四月、新米教師として赴任してから、昭三十五年三月までの十四年間という長い歲月でありましたので、思い出の種にすることはありませんが、紙数の関係上、終戦直後から数年間の出来事について申し述べたいと思います。先ず当時の校舎は、昭十九年二月樽子山の校舎が全焼して以来、現在の公民館のところに建つていた仮校舎に移転住いであり、廃屋同然のボロ校舎であり、教室の壁は崩れ落ち、廊下や体育館の床板は、いたるところ穴だらけ、窓ガラスの大部分は破損した儘であり、ところどころベニヤ板で窓をふさいでいたので、昼でも校内はう

来、級担任は小野先生野呂先生私の三人で、しばらくして出来て来た教科書の一部は新聞紙を折った様なタブロイド版のもの、これでや、落ちついた授業も出来るようになった。

高 橋 直 三

(旧職員)

す暗く、穴に落ちないように注意して歩くことが、一苦勞でありました。冬季になると校舎内は、たちまち雪野原と化し、勿論ストーブもなく、大きな四角の火鉢に、手当り次第薪を燃やし、そのため煙は階上、階下を問わず、全校にたなびき、寒さと煙のために、眼を真赤にはらしながら、机に向つていた情景が、今でもありありと思い浮かべることができます。それだけに昭二十三年三月、樽子山に再建された新校舎に、全校生徒の手で移転引越してきたときの喜びは、当時在籍していた諸兄でなければ、わからないと思います。

また当時は、衣食住共に困窮の極にあり、文字通りの耐乏生活に甘んじなければならなかつたので、当然ながら教材教具にも、事欠き、辛うじて確保できたものは、黒板とチョークぐらいのものでありました。教科書はタブロイド版を四つ折りにした新聞紙みたいなもので、ペーパーナイフを入れて使った記憶があります。昭二十一年の秋に、体操部が第一回国体に優勝した折、全校生徒による旗行列を計画いたしましたとき、生徒の

最後に建校創立五十周年の意義ある年を契機といたしまして百年の大計のもとに、さらに発展されますことを祈念いたしまして、この稿をおわります。五〇・八・六記

定時制創設当時の思い出

柳谷了因

(旧職員)

新教育制度の実施に伴い、昭和二十三年六月本校にも定時制課程が開設されることとなり、普通、農業、工業の三学科を設置、生徒を募集したところ、百余名の応募者があったという。

同時に開設された能代北高定時制課程とも百名を上まわる応募者があつたそうだから、当時としてはまことに時代に即応した教育機関が設けられたものと言えよう。

初代の定時制主事として開設に当られた横川先生の熱心なお勧めによって、私は翌二十四年の春から本校に奉職することとなった。当時専任教員は主事以下三人、事務室の一隅を借りて居住したものだった。やがて四年生が誕生した頃には職員も助手、事務職員を含めて十人位にまでなり、玄関脇の一室を専用職員室として使用できるようになったのである。

さて創設当時入学してきた生徒たちの年令、職業、経歴は実に千差万別であった。ほとんどが旧制高小卒で、またその大部分が青年学校を終えていた。二十才を超えた人が多かったよう

に思う。女生徒も何人か入ってきた。市内の商店や工場に勤める人たちに混って、小学校の先生、国鉄職員、登記所や裁判所勤務の人たちも見られた。本当に雑多な集団ではあったが、いずれも「働きながら学ぶ」その意欲は実に旺盛であった。

私は国語と歴史を担当したが、当時新しい教育課程に対応する検定教科書がまだ出まわっておらず、文部省発行のパンフットまがいのものがあるだけだった。資料や参考書を読みあさり、苦心惨たんして教材作りをしなげら授業を進めたものだった。

—先生の授業はジグザクコースで、こっちがはらはらさせられました。——

——先生は、やっと終点に着きましたね。——これは日本史の授業を終えた三月提出させた一人の優秀な生徒の感想文にあった一文である。

やがて旧制中等学校卒業者は四年生に編入できることとなり、二十七年頃だったろうか、旧制能代中を終えた人―私より四期先輩―が入ってきた。娘さんは北高在学中だという。何とも授

業がやりにくいので、一番後ろの席にすわることに、授業中は発言しないことなどを懇請しておいた。ところがご本人は最前列に陣取って、質問はするし、意見は述べるし、その熱心さについてこちらも本気になって、後輩意識を忘れて甲論乙論ばくしたことも懐かしい思い出である。

定時制課程のことなど

昭和二十四年十月、能代南高校教諭に任ぜられ、三十五年四月、全日制勤務、四十八年四月、能代工業高校に転ずるまで二十三年余、職を能代高校に奉じていたわけだが、その間何らなすことなく、ただ永く勤めたというだけで、まことにお恥かしい次第である。

私が勤務したころの定時制中心校は、一学年八十名を数えるほどの人数であったが、卒業時には大てい十名台になってしまった。それほど勤労と勉学の両立はむずかしかった。（これは今でも変らないと思うが。）当時の教師陣は、主事以下専任教諭六名、外に兼務（全日制）講師が若干名という陣容で、生徒の殆んどが社会人であるせい、教師も生徒も大人同志という気易さがあった、和気あいあいたる雰囲気であった。学校行事などは、常に全日制と共に実施された。当時定時制は、中心校

かくて幾多の勤労学徒を育て上げてきた本校も、社会情勢の変化に抗し切れず、やがて能代北高に合併されることとなった。昭和三十二年の春である。いくつあった分校も次々と統廃合の浪に洗われ、三十九年峰浜、八森両分校の能代北高移管を以て、本校定時制課程はその幕を閉じたのである。

市 川 嘉 宏

（旧職員）

が本校にあり、八森、二ツ井、藤琴、富根に分校、更に常盤に分室があった。昭和二十九年に、沢目に分校が設立され、私は初代分校主任として赴任した。現沢目中学校が校舎である。生徒数は一年普通科十七名を数え、地域の勤労青少年が向学心にもえて、ふるって集ったものである。この年の夏、全日制の沢目地区PTAが開かれた際など、全定時課程の職員並びに沢目分校定時制生徒総出で地引網をして親睦を深めたものである。また、分校間の交流などもはかり、職員生徒が、夜、自転車をつれて八森分校へ出向いたり、八森分校が来たりで、対抗試合を行い、座談会を開き、楽しい一夜を過ごしたこともあった。

昭和三十一年四月、私は再び中心校勤務になったが、翌三十二年中心校が能代北高校に統合されると同時に、富根分校に転勤した。こゝも夜間だけであったので、中学校を借りて授業を

していたが、冬期間は昼間家庭科も併置することにして、二ツ井町と交渉し、富根公民館を借り受け、能代高校から、廃棄された古机を運び込んで教室を造り、どうやら独立校舎を形にして、生徒も職員も自分たちの学校であるという意識を持ち、また、田圃を個人から借りて、夜電灯をともしながら、田植えや稲刈りをした思い出は忘れられない。三十五年全日制に転勤す

その日々

その日、駅前には砂が巻いていて、人影がない。「駅まで出迎える。下宿も用意してある」という学校長の手紙一本で（採用試験もなにもなかった）着任したのだった。昭和二十九年四月三日。輪タクが寄ってきて「歩けば三十分はかかる」というので乗ったらずに降ろした上に、釣銭がないとかで倍の百円をとられた。事務室で一時間余待たせたあとで出てきた校長は「新卒を採った覚えはない。南高へ行ってみろ。」とおっしゃる。（北高の小野校長だった。）南高がなかったので能代高校に行くのと、小林道一校長がみえて「おお君か。君をとったが、ぼくは転出だ。そう、君は海経出身で経済に詳しいだろうから舎監になってもらうよ」——ここに海軍経理学校がでてきたのに驚いた。夕刻、舎監室に十二名の寮生を集めて、一升ビンを立てて「よろしく」と挨拶した。茶碗酒をぐいぐいのむ生徒をみて、

るまで三年間、まことに楽しい生活であった。

能代高校定時制は、三十九年三月に、十五年十か月の歴史を閉じたが、その間幾多の人材を社会におくり出し、それらの人々がそれぞれの分野において、大いに活躍されていることは、まことによるこぼしい限りである。

白鳥邦夫

（旧職員）

高校に赴任してよかったと感じた。海鳴りがきこえる。——私は旧制高校と全くおなじものに考えていたので、後日、禁酒禁煙の校則を知っておどろいた。——この寮生とはのちに「寮の灯」という雑誌をはじめますが、まずは毎日海へ行くことになる。翌日、新任式。紹介の中で出身校も言わないように校長にお願いしたがダメだった。青空の色の派手なダブルの背広（大学の生協の吊しを買ったもの）で片手をポケットに入れたまま斜めにお辞儀して「どうぞよろしく……」とだけ言って降壇した。このキザな演技はのちに「評判」になる。——この日、公園のS庵で歓送迎会があった。

三日ほどして部屋にきた男（松井紀夫先生・浦和出身英語）が妙に見たことがあるように問うと「あは、君が砂の中に寝てたのを担いできてやったの俺だぞ」という。ああ、それで

ズボンの裾から大量の砂がでてきたのか。——この男か。昨年九月着任してすぐ教室でインターを歌って物議をかもしたという伝説の主は。さらにのちに、この人が、三月私が東京で「別れ」てきたM子さんの知り合いと解ったとき、「見知らぬ、遠い」能代もまた日本の中なることをつくづくしらされたのである。新聞部の大山明くんが机に伏せて鼻音高い私を「新任紹介」のインタビューにきた。なぜ来たか。「遠いから、歩けるから」

私の思い出

早いものでもう五十年になる。まるで夢のような気がする。我々が始めて入学した場所は、当時の工業講習所の一部で、二つの教室と狭い体操場とが我々の全世界であった。課外運動などは市の記念グラウンドで行なった。狭い借家住まいのせいだろうが、放課後はさっそく下校しなければならなかったようである。いつか放課後に奥の方の一室で若い先生たちが卓球をしているのをしばらく見物していたら、帰りがけにある別の先生に「今まで何をしていたんだ」とどなられた記憶がある。

やっと樽子山の新校舎に移れたのはその年の秋であつたろう。それからはじめは体操場だけで、その一部をかりに仕切って二教室作ったものであった。天井は体操場の屋根まで吹き抜けであ

すると先生の趣味は旅行ですか。「私は教養と趣味を拒否します。……二人のキザが一致して直ちに海へ飛びこみに行つた（勤務時間の制限がなかった）のちに十一月三日まで競争で八か月間、この人と私は泳ぎつづけたのである。——もう紙がないので、詳しくは、来年発行の『能代高校物語』にゆずります。」

(完)

佐々木 正之

(旧制一期)

つた。冬にもストブがなくて、教室の後の方に大きな鉄の火鉢が置かれていたと思う。ここで一冬過ごしたのだが、それほど寒かった覚えがないのは、若かったためか、のんきだったせい、それとも記憶違いだろうか。教員室がどこにあったかは記憶がない。

一年のときは、毎週一、二回全員が数班に分かれて、野球とか庭球とか、きまつた運動を順ぐりに行なった。課外運動というのである。これは二年のときも続いたと思う。三年のころからは自分の好きな運動を選んでやるようになった。私は野球をやった。しかし、剣道や柔道ほどキチンとした練習でもなかったようである。硬球を用いたのは、多分小野先生という東北学

院？出身の先生が来て指導されてからであつたらう。それでもだんだんかつこうがついて来て、四年のときには、どこかと試合をしようかということになったが、まだ選手制度もなかったのになかなか面倒で、やっと実業団との練習試合が許されたのは、秋も末のことであつた。たしか十一月三日と思うが、学校で明治節の式が終わつてから、午後の試合のために野球場にラインを引いていたとき、にわかに大つぶの霰が降つて来たことを思い出す。霰はすぐ止んだが、こんな天候でまともな試合ができたのか、霰のために試合が流れてしまったのか、どうも試合そ

創立五十周年によせて

母校が創立五十年を迎える。感慨ひとしおである。

五十年前を語るといふことはなかなか難しい。少年時代の自分の思考がどうであつたか、まして中学校で習つた学科の中味がどうであつたかなど、とても思い出せない。

しかし、東京同窓会で旧知の面々に出会い話し合っていると、当時の人の思い出は鮮やかに目に浮び、言葉になる。時の移り変りを忘れてしまう。不思議なものである。

母校の歴史はそのまゝ、昭和史の投影である。半世紀と一口にいうが、昭和史の五十年は日本民族にとり、過去何百年という歴史のできごとに匹敵するほどの激しい変遷と重みをもつ。そしていま昭和五十年代はこれからの日本の進路にきわめて重要

のものの記憶がはつきりしない。あるいは、最初の幻の対外試合であつたかも知れない。

「すずかけ」という生徒たちの文集を作り、何号までか自分たちの手でガリ版で出したのも、三、四年のころである。皆川君なんかの主唱であつたと思うが、五年でも続けられたかどうかは、私があるときはいなかったのによくわからない。

私はまことに平凡な中学校生活を送つたので、断片的な思い出はいろいろ尽きないものがあるが、年とともに薄れて、今とりたてて語ることもないようである。

山崎 五郎

(旧制 二期)

な意味をもつ時代でもある。

能代中学創設して五十年というこの時期は、まさに日本の歴史に特筆されるべき五十年とその時期を同じくする。

能代中学は能代で古い学校ではないが、能代に普通中学が創設されるということは、当時では大きな出来ごとであつたようである。能代工業高校の前々身ともいふべき工業補修学校の創立にさかのぼると、明治三十九年と記録にあり、商業高校の前身青年補習夜学会のうぶ声も同じ頃である。木都として、また商業都市として農業教育の充実と人材の養成は当時の能代の必然の要請であつたと思う。

一方、明治政府が取り組んでいた男子中等教育の充実、女子

の家庭人としての準備教育を目的とした高等女学校の普及がはかられるなかで能代では実科高女が一足さきに設立され、その後十年の歳月を経て能代中学の誕生となる。建設費の殆んどが地元負担であつたというから、能代にとっては待望の学校建設であり、熱意も相当なものであつたに違いない。

新設中学に入ってきた人々の中には、何年もこの日を待ちのぞんでいた人々も居つたと聞く。新教育、新校風の確立など、新たに造るということに皆が真剣であり、意気軒昂たるものが

前 進

今年の六月上旬、日本バレーボール協会五〇周年記念打合せ会に出席し、五〇年間の競技記録を見ると、その中に能代高校の名が記録されておつた。

(1)昭和12年明治神宮体育大会男子中学校準々決勝で対福岡師範に2-1で苦敗する。

(2)昭和30年全国日本男子高校選手権大会準々決勝に進出

(3)昭和31年全国日本男子高校選手権大会優勝

(4)昭和32年全国日本男子高校選手権大会準優勝

(5)昭和32年国民体育大会男子高校第三位

と立派な記録が列挙されており、私の現役時代、そして在職時代部員指導当時が思い出されると共に、尚一層母校の誇りを痛

あつた。同時に責任という觀念が特に強かつたと思う。

寮で集団生活を送つた私にとって、ストライキ事件は忘れることができない。人間関係を大事にしなければならぬこと。事を起こすより、収めるのが如何に難しいか、戦後労働省に入り労使紛争の殆んどにたずさわつた当事者としてよく思い出したものである。母校史の五十年には様々のことがあつた。これから様々のことが続く。しかし私達にとり、かけがえない母校である。大事にしたい。

大 原 義 正

(旧制十期)

切に感じました。

本校のバレーボール部の創設は大正15年で、県内ではもっとも古いほうで五十年の歴史を有し、初の全県制覇は昭和四年で当時の選手は現在のバレーボール部OB会会長平川正司先輩で、以来、つねに県内の上位を占め更に東北にバレーボールの強敵現れると、全国にその名をさせた。

私は、つねにチームワークの完成をふだんの礼儀に求めている。だから部員の無礼は決して許さない。「礼を知らずしてほんとうの強さは得られぬ」という信条であり、更に監督部員が互に尊敬と信頼をもって協力し、勝つておごらず、負けていじけず、つねに全力を出し切る心構え―これが試合に何日も現われ

るべく訓練指導を行った。現在東洋レーヨン九鱗会監督そして全日本チームである菅原貞敬（東京オリンピック日本代表選手）君も、このような信条をもって日本代表選手チーム作りに精進しておる。

現役学生諸君も、この過去の母校の偉大なる数々の実績を誇

野球部生活の思い出

昭和十七年、私は旧制能代中学の四年生だった。その年の六月、われわれ野球部は、近づく全県大会にそなえ、教室を借りて合宿生活に入っていた。そんな日のある深夜、日中の猛練習で疲れ、ぐっすりとなぐこんでいたわれわれは、突然、大きな怒鳴り声で眼をさまさせられた。その男はこう叫んでいた。

「おい、甲子園へ着いたぞ、みんな起きろ！」

うすい裸電球の下、ねむい眼をこすってよく見ると、その男はなんと私の隣りにねていた筈のS君ではないか。いつのまに着がえたのか、洗濯のきいた試合用のユニフォームをまとった彼は、手にもったバットで床をたたきながら、気がいのように教室の中をのし歩いているのだった。「おい、みんな起きろ甲子園へ着いたんだ！」と絶叫しながら。

やがて、キャプテンのHさんが立ち上った。そして、荒れ狂うS君の胸元をつかんで、「何をねばけているんだ！ 静かにね

りとし、自分を大切に自から訓練による主目的完成のため、大いに前進されることを切望する。

最後に、現職時代の監督、武田重蔵先生（現能商在職）の指導と協力による黄金時代の完成を心からお礼と感謝をします。

佐々木

満

（旧制十五期）

ろ!!」といって強い平手打ちをくらわした。S君は、迷いからさめたように元の寝床にもどり、深い眠りにおちていった。あたりには再び元の静寂がやってきた。しかし、耳をすましてみると、あちこちから、すすり泣きの声がかきこえる。キャプテンのHさんも泣いているようだった――。

三〇年以上も経過したあの夜の出来事を私はまだ覚えていて。恐らく生涯忘れることがないだろう。そして、中学生たちの心をこんなにも強く捉えている「甲子園」というものは一体何なのであろうか、私にはいまだに分らない。

――県南の湯沢に近い田舎の小学校をおえた私が能代中学に入ったのは一四年春だった。入学式までの一〇日間、私は毎日のように能代中学のグラウンドに出かけ、野球部の練習を見ていた。そして春の陽差しを全身に浴び、元気に声をかけ合う野球部の人たちに強いあこがれを抱いたのだった。入学式の当日、

すでに私の顔を覚えていてくれたある先輩のすすめに従い、まよわず野球部に入った。爾来五年間、私の中学生生活は、野球に始まり野球に終る。戦時中のことで、野球をとりまく環境は物心ともにきびしくなっていく。やがて全国大会、全県大会も中止。しかしわれわれは練習をやめなかった。破れたグローブは縫い合わせ、ユニフォームにはつぎをあて、最後には地下足袋までもはいて、いつ再会できるか分らない大会をめざして精進

“お手盛り”の修学旅行

鈴木良夫

(新制一期)

「おい、みんなで修学旅行でもやろうじゃないか」

——誰がいいだったのか、いまはっきりした記憶はない。ただホーム・ルームの時間（これも当時は単なる“自習時間”だったのかもしれないが）に、なんととはなしに、こんな話がまとまったのである。昭和二十三年の秋ごろだったと思う。

私と誰か数人で、担任の鎌田宏先生に報告に行った。こまかい“やりとり”は、あまり覚えていないが、とにかくあつさりOKだった。旅行先は、それからみんなで相談してきめた。「あまり遠くもなく、近くもないところを」というので、宮城県の松島へ行くことになった。実に“自由”だったのである。

昭和二十四年春、われわれは新制「能代南高校」の第一期生

を続けた。

今思いかえしてみると、すべてがただなつかしい。そして激動の世の中にあつて、若い時代の五年間を一つのことのうちこんだ経験は限りなく貴いことに思える。もう一度この世に生れることがあるならば、私は同僚S君らとともに再び能代高校野球部に入り、あこがれの甲子園をめざしたい。

として卒業した。仲間は、たしか四十数人。旧制「能代中学」へ入学したときは百五十人。それが、昭和二十三年の「六・三・三制」への切り替えで、同級生のうち百人ぐらいが中学五年で卒業。あとは新制高校の三年に編入されたのである。

中学五年で卒業した組が「能代二十期生」。新制高校三年への編入組が新制一期生というわけだが、学校側も一期生の扱いにはかなり遠慮や“とまどい”があつたのではない。

いまにして思えば、われわれもなんとなく“お客さん”のようを送りだされたという感じがしないでもない。生徒がいいだして生徒が行先をきめた“お手盛り”の修学旅行——こんなことができたのも、実は戦後の混乱の時代だったからであらう。

旅行は二泊三日だった。松島へ着く前に、ひとつの思い出が

ある。花輪線と東北本線の接続駅「好摩」で、仙台方面行きの列車を待ち合わせていたとき、白髪の長身の紳士を囲んだ十数人の一団と出合った。駅員か誰かに聞いたら「芦田さんだ」という。とすると、このときの一団は、当時の芦田均首相と同行記者団や護衛の人たちだったということになる。

後年、私も新聞記者として、歴代首相に同行する機会が多かったが、このときの出合いが、いまでも強く印象に残る。

松島で一泊。翌日、船で松島湾を一周して塩釜へ着く。それから仙山線に乗りかえ「山寺」で下車。芭蕉の名句「静かさや

夜の学び舎

若 林 秀 稔

(定時制二期)

ただいま昭和五十年。そして我が母校の開校五十周年。僕が四年間の単位を修得して二十余名と共に卒業したのが二十七年の春だから……いやあ二十三年も経ったのか。今更乍らに矢の如き光陰に目をみはる。あの頃の卒業生は十八才位から二十何才位だったろうか、大半が二十才以上だったろう。旧制から新制へ文字通りの過渡期だった。戦後世情が変わり、新教育を身につけねばと、確かに向学の志高き朋輩の集いが定時制だった。さて修学旅行が近づいた。だが着てゆく服がないので、当時愛用のギターを売って背広?の上着だけ買った。そして全日制の生徒と同行。他の生徒は全部学生服、こちらは背広らしき服

岩にしみいる蟬の声」で知られる名所。そういえば、このころ鎌田先生から芭蕉の名講義をうけていたので、旅行の全コースが「奥の細道」探訪といった趣でもあった。最後は山形で一泊した。

帰りの列車はガラガラだった。仲間で歌のうまいのがいた。その時の歌が「バラのルンバ」と「憧れのハワイ航路」だったというのも懐しい。とにかく、あまりパリッとした思い出はない。やはり、貧しい時代だったんだなあとと思う。

を着用して行ったため、駅員や旅館で先生と間違われて気をよくしてみたり、その車中になけなしの財布を掏られて青くなり、旅行半ばにして諦めんとしていたら、次の停車駅でアナウンスされ、奇跡的に戻った一件は想い出の事件である。三年の時だったか山王丸先生から微積を習った時何人かの生徒と鍋を削って勉強したこと、所々電球の消えている旧体操場でのバスケット、船山先生の気合の懸った剣道、夏分は陽が落ちるまで校庭で野球、町には当時ダンスが流行し始めていたが、勿論単位にはない。そこで数人のメンバーと時間をさいて、マジメにレッスンに及んだこと。このレッスン、二十年後の今日まで誠によ

く活用されてきた。活きた学問？とはこのことか。連合生徒会があった。本校を中心校として藤琴、二ツ井、沢目、八森の各分校の生徒が一堂に会して文化祭、合同競技が活発に行われた。分校から参加した女生徒が珍しかった。

二三の友達と日曜日の晩など、当時の柳町のサロンドームに入った。それは一パイやるのが目的にあらず、行けば必ずといってよい程、来ていた進駐軍と片言でも会話？するのが楽しみなのである。習った英語がどれ程通じるのか、話してみたかったのである。今にして思えばまことに汗顔の至りである。いや良い方に解釈してそれだけ熱心だったのである。又これは一年生（昭和二十三年）の秋頃、柳谷先生の時間であったか、皆静かに授業中、突如として寝言発生「そろそろイグデュー」これにはみんな驚いた。本間君が昼間の勤めの帰り、友人宅で一杯やっつの登校、昼の疲れに程よい酔心地、静かなる環境「い

激動の六年間

吾々が在学を許された六年間、それは本校にとっても、日本の社会にとっても、極めて動きの激しい時代であった。

それは先ず、本校にとつて、学制切替えの時期であり、校舎再建のとき、そして共学制実施の時期であった。戦い止み、翌二十一年あこがれの能中に入学、その秋学制改革と共に能中か

やあすつかり御馳走になってしまった。学校に遅れるからそろそろ行こうか」と口走ったのが実は教室の中と云う訳。まさにやる気充分の心構えだ。先生の優しい微笑が印象的だった。この頃の先生方の服装は将校服あり、軍属服、詰襟の学生服等、背広姿は少かったようだ。我々が入学した当初は一年生だけで百五十名、一クラス五十余名で少し遅れると自分の席がなくになるので、競って登校したものだった。夏の夜間授業は文字通り蚊に喰われ乍らであった。ウチワ持参で中には浴衣で出席した生徒もあった。惜しむらくは、第七期生の卒業後中心校が北高校に移ったこと。ともあれ我が定時制出身者が通学当時の忍耐力を活かし、実社会で着々と貢献している事実を見る時、旧き学舎に一惜を覚えつゝ、新校舎に無限の希望を托して述懐の筆を置きます。

丹 波 望

（新制四期）

ら能南高への移行決定。これにより吾々二十二期生二二五名は能中最後の入学生ということに。万年最下級生ノ翌二十二年春よりその名も能南高「併設中」二年生。かくして二十四年春、当初予期しなかったことに、学友を「併中卒業生」として送り、いれかえに、いわゆる新制中学より新たな仲間を迎える。（因に

能中、能高はこの併中卒の仲間を決して忘れてはならない。) しかして多くの者にとって同じ先生達に六年間導かれた恵みは今にして思えばまことに大きい。一九年校舍焼失以来能中は長根町、旧淳城校あとに仮住いしていた。吾々の入学も、この明治天皇ゆかりの、しかし大分くたびれた校舎で、入学後間もなく校舎再建の相談。二十三年春校舎主要部の完成を待つて引越し、生徒たちそれぞれが机、椅子の運搬をやる。盗難予防のため窓ガラスに能中のネーム入り、杉の香のする校舎だった。その校舎も老朽して今や再度新築、感慨が深い。二十六年春には能南高に初の女生徒が入学、学校に花の咲いた感あり、六期生がうらやましいかぎりであった。

在学中のこの時期は社会の激動を「教育」がともに受けたときでもあった。入学時の二十一年はきびしい物不足と物資不足。カーキ色の学生服も抽簞による配給。何よりも能中の徴である帽子の黄色いひもが手に入らず困る。紙の不足、教科書はきたないざら紙製で、前・中・後期の三回に分けて配布された。前期分三十銭、中期分五十銭、後期分一円二十銭。約半年の間に物価四倍。教育の混乱——東洋史、西洋史は習ったものの中学では日本史はなく、内容のはっきりしない「公民」なる教科があった。民主主義——中学入試の口答試問三題中一問は、「民主主義とは何か」であった。「社会」なる時間に「デスカッション」(「討論」に非ず)ということ教わる。高校に至り、生徒会誕生。生徒会主催の運動会に、物資不足のおり、賞品を求めてリヤカーをひき商店を訪問、各部活動、校外活動(引揚促進学生同盟等)校間交流(音楽部等)もまた盛んだった。また学級とは別にホームルームが設けられ自治活動が盛んであった。

この時期の思い出にあることとして、体操部の全国制覇などの活躍。校章・校歌の改訂。能代市の大火と、生徒達の手わけして焼あと整理手伝い。先に在校生より集めた二百余冊の蔵書を中心に図書室の開設。大学入試の前に進学適性検査。高校生風俗としてのマント、朴齒の高下駄等、記憶印象に残る。とりとめなきことながらこの時代の証し、また同時代の仲間の回想の手がかりとすべく記した。

かえりみて、まことに激動のときであった。しかし他ならずこの激動のときに生きあわせ得たことをうれしく思う。と共に十代にして学んだ民主主義を大切に、平和を創り出す者として生きたく願っている。

